

2016年2月1日

トヨタ財団 国内助成プログラムにかかる 評価の取り組みについて



1. トヨタ財団/国内助成 プログラムについて

トヨタ財団は、1974年

「人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資することを期して」

トヨタ自動車100%出資により設立

【公募助成】（各プログラム2015年度予算 約1億円、総計 3億3000万円）

➤ 国際助成プログラム

アジアの共通課題と相互交流：学びあいから共感へ

➤ 研究助成プログラム 社会の新たな価値の創出をめざして

➤ 国内助成プログラム 未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティー
地域に開かれた仕事づくりを通じてー

➤ 東日本大震災復興支援関連助成（国内助成プログラム）

【非公募助成】（各2015年度予算 2000万円、1000万円 計3000万円）

➤ イニシアチブ・プログラム

➤ 社会コミュニケーションプログラム



2015年度のテーマ：
「未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティ~地域に開かれた仕事づくりを通じて~」

2014年度実績（活動助成）

- 助成総額：8,580万円
- 助成件数：20件
- プロジェクトあたり平均助成額：
2年・429万円/件
- その他 検証・提言助成

2. トヨタ財団・国内助成 プログラムに係る評価 の取組み

- 評価の目的：
 1. 成果の可視化・説明責任
 2. 学習と自己改善（エンパワーメント）
- 評価の主体：助成対象者（内部評価）
- 評価のデザイン：事前事後比較
- 評価のタイミング：
 - 事前評価：申請書（セオリー評価）
 - 実施段階：経過報告書（半年おき）
 - 終了時：実施報告書（2年後）

2013

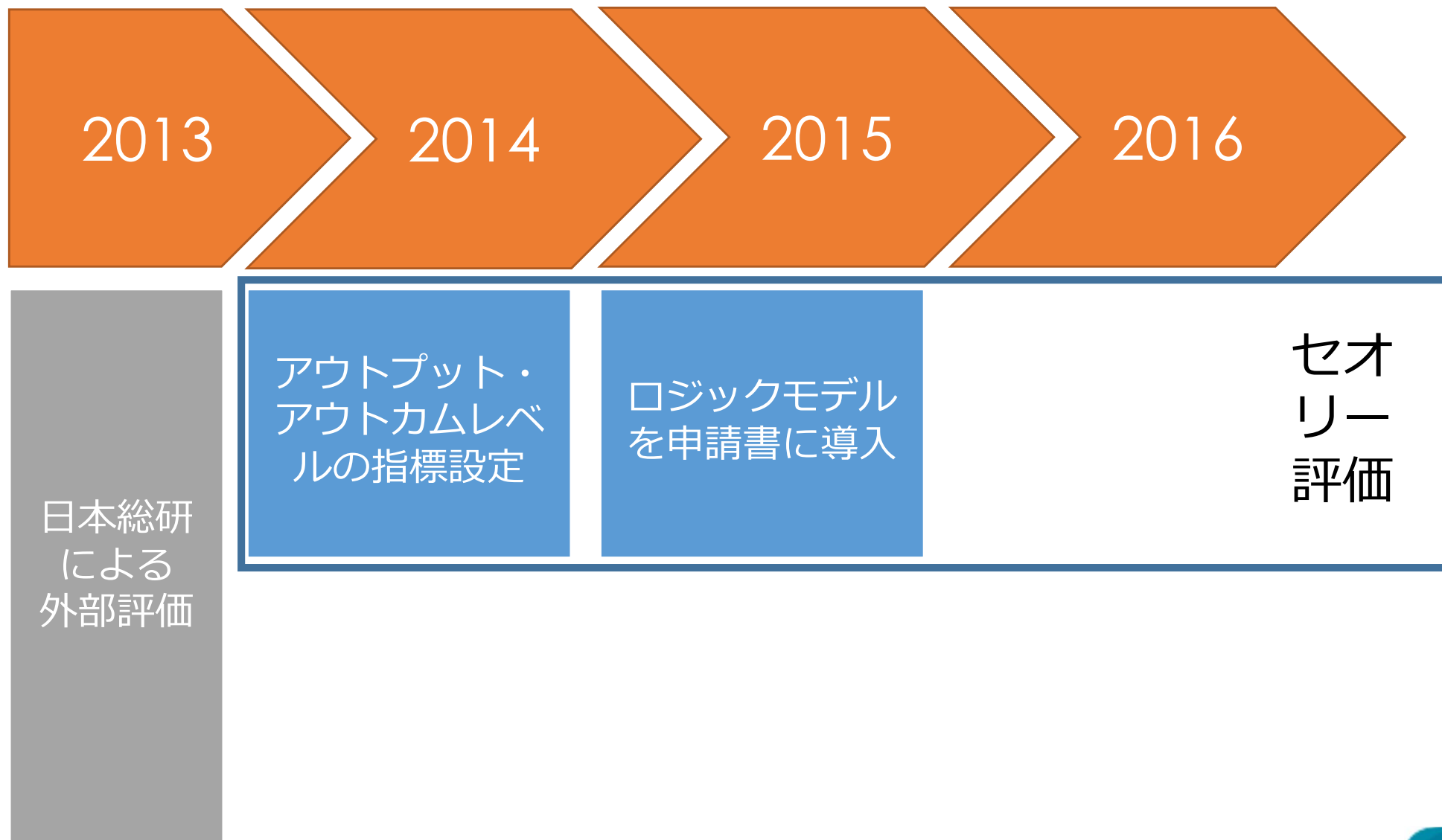
日本総研
による
外部評価

- 評価対象：2008年～11年度の助成対象プロジェクト59件
- プロジェクトの規模 1件55万円～631万円（期間1-2年）
- 評価方法：実施報告書 & アンケート
- 評価指標
 - 課題別評価指標群：A.経済、B.社会、C.文化・環境、D.教育
 - 非課題別評価指標群：I.目標志向、II.継続性・波及性、III.多様な個人・団体の関与

【学び】

⇒助成プログラム全体の到達目標が不明確→助成プログラム成果目標（中期計画）を暫定的に設定

⇒ 個別プロジェクト評価に必要な十分な情報が得られていないことが指摘される→申請書および報告書の様式を見直すことに



- ・ 2014年度、申請書内にアウトプット・アウトカムレベルの指標（KPI）の記入を義務づける

→ しかし申請書がロジックモデルとして整理されておらず、プログラム担当者が主要なKPIを企画書から抜き出し再整理
（例：別添資料 プロジェクトめむろ）

※ 助成対象者の設定した指標が適切かどうかの判断は財団側では実施せず（企画書重視）

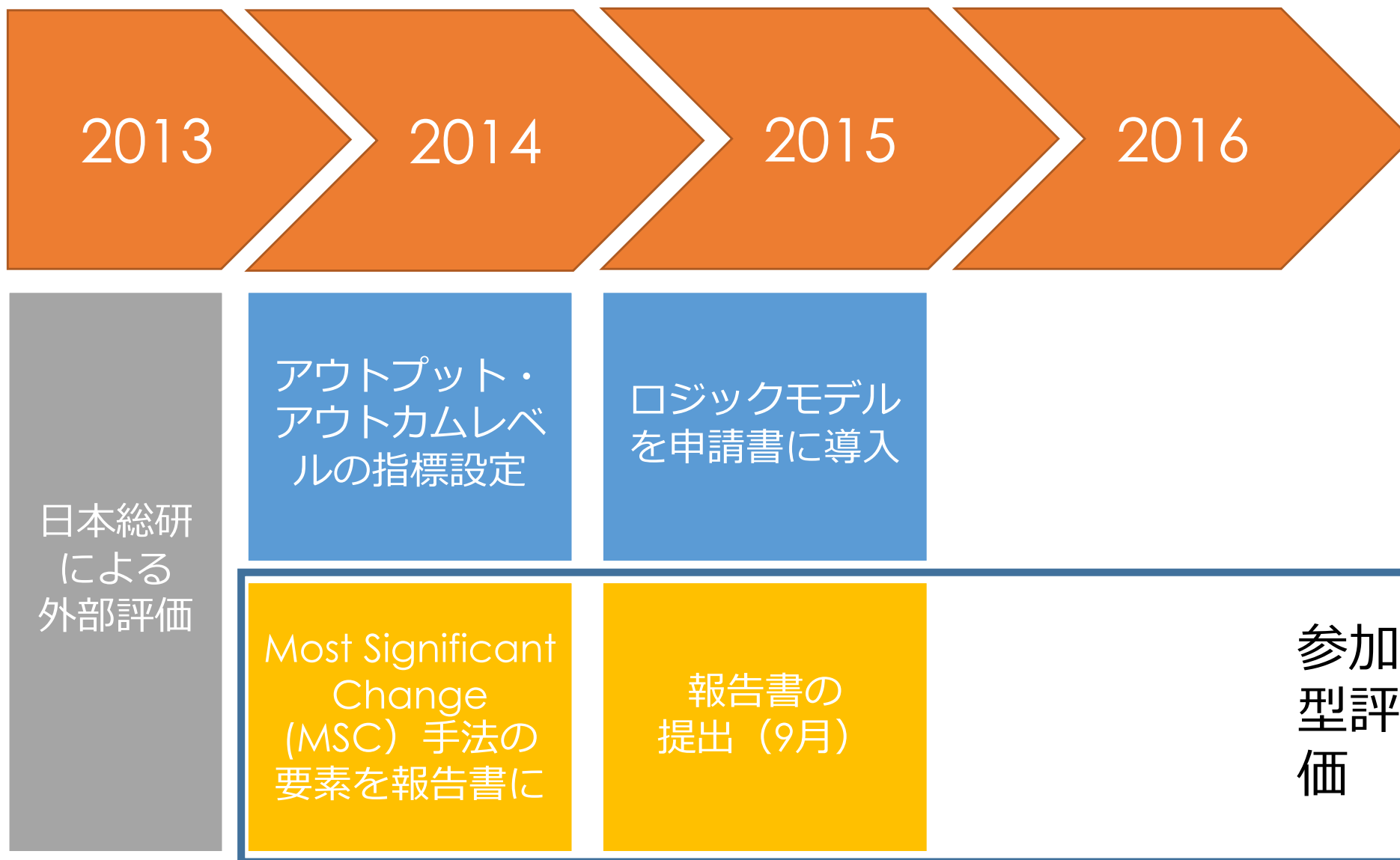
- ・ 2015年度、申請書をロジックモデル形式に再設計

（参考）モニタリング（助成期間中1～2回程度の担当者の現地訪問）、中間報告書でKPIの達成状況を財団側が把握

中長期目標（5年から10年）

アウトカム目標（2年）

アウト プット①	アウト プット②	アウト プット③	アウト プット④
活動①	活動②	活動③	活動④
予算①	予算②	予算③	予算④

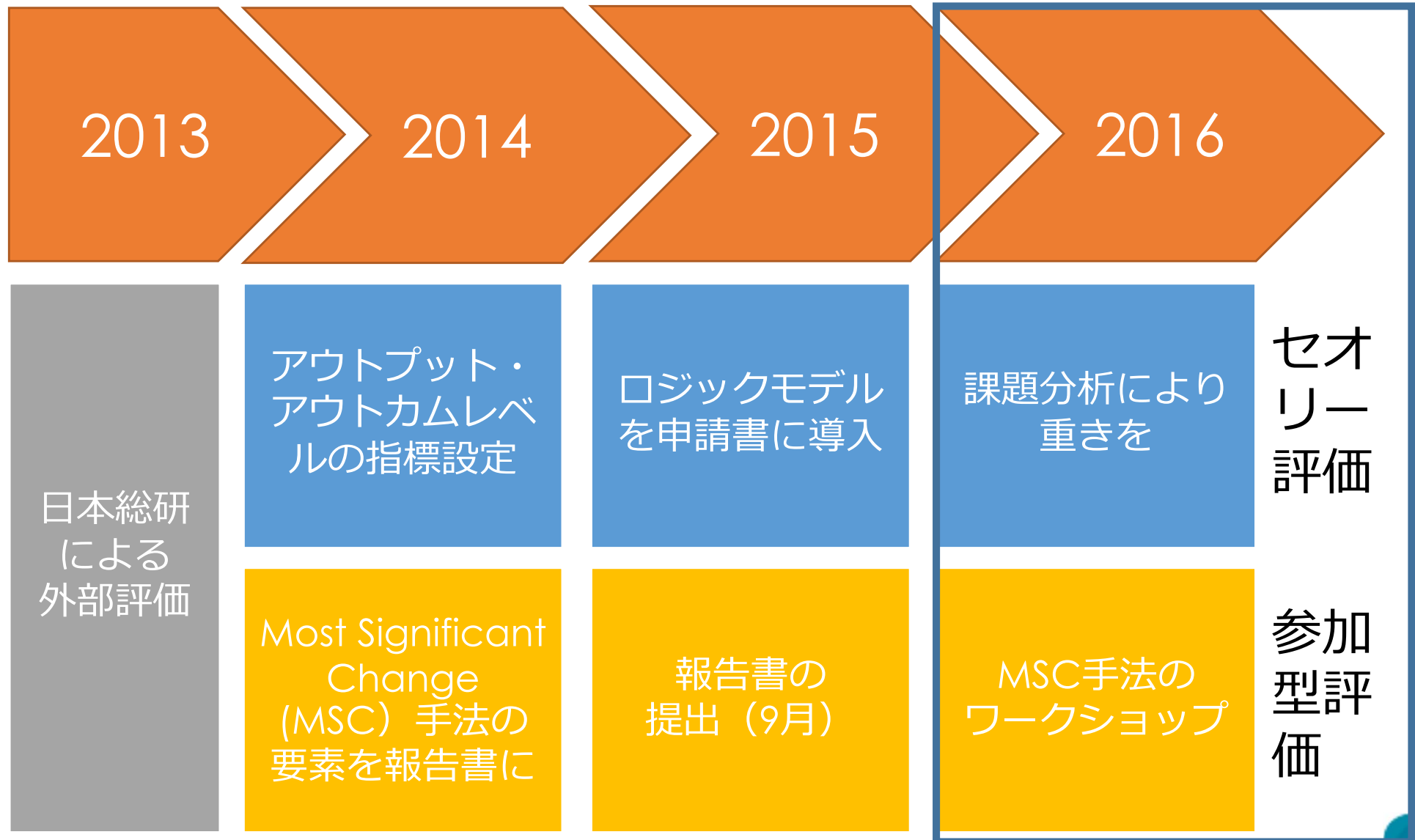


- モスト・シグニフィカント・チェンジ(MSC)手法は、参加型モニタリング・評価手法の一つ。プログラム全体の業績を評価するうえで有用であり、インパクトや効果に関する情報を提供してくれると言われている。
- 狙い：
 1. 社会的インパクト評価では捉えられないネットインパクト以外の外部要因を含めることで、地域の課題解決に向けてロジックモデルの仮説変更の可能性を含める。
 2. 助成対象者が学習し、自己改善するようになる。

- 報告書での設問：

「プロジェクトを実施した結果、過去半年間で地域や個人に起こった変化の中で、印象に残るエピソードをチームで話し合い、その中から1つだけ選びできるだけ詳しくご記載ください」 & 「そしてそのエピソードを選んだ理由を合わせてご記入ください」

→回答例：「シングルマザーのA氏は○だったが、
△研修に参加したことから、◎のことに気がつき、それから■ができるようになった」
(+選んだ理由)



- セオリー評価：

- 地域課題と目標の関係が不明確。現状把握が不十分。
→変化の法則（Theory of change）が分かるように地域課題を「プロジェクトデザイン」に加え、申請書において課題の把握状況と解決方法により重きを置く。

- 参加型評価：

- 代表者個人の意見だけを書いてしまう場合があった。
→参加者の一覧を書いてもらう。
- 参加型評価（MSC）に係る実施者（助成対象者）への時間や手間などの負担感
→メリットを理解を深めてもらうために、MSCの第一人者である田中博氏を招いて参加型評価のワークショップを助成対象者向けに開催予定（4月）。

- プログラムの総合評価/プロジェクトの横断的評価の難しさ
 - テーマ/指標が異なる複数プロジェクトに対して比較可能な評価を行うために全案件についてSROI等の可能性
- 現在は、トヨタ財団が個別プロジェクトの価値判断をする（評価主体になる）機会がない
 - 外部協力者を含め財団プロジェクト評価チームの可能性